

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	世田谷区船橋 5-14-19
園名	船橋東保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

子どもが遊びこめる環境づくり

<テーマの設定理由>

前年度園庭あそびの充実を図ろうと取り組んできた中で、子ども達が自然と触れ合ったり、イメージを膨らませて遊ぶ姿が見られている。室内の環境について、子どもの姿に応じて見直しを行っているが、十分に出来ていないため、園庭に限らず室内の環境も充実させたいと考えたため。

2. 活動スケジュール

- ・5月～8月 あそびを選択できる環境の中で、自分のやりたいあそびをみつけ楽しむ。
- ・9月～12月 落ち着いて遊べる空間の中で、自分の好きなあそびをじっくり楽しむ。
- ・1月～3月 自分でやりたいあそびを選択し、あそびこむ。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

落ち着いて遊べる空間づくりをするため、棚やテーブルを用意した。子どもが興味を示しているもので数が十分でなかった玩具も用意し、一人ひとりがやりたいあそびを選択できるようにした。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ① どうなるかな？ やってみよう。（1歳児）
- ② 友だちと一緒にはなんだか心地よいね。（1歳児）
- ③ なんだろう？ 見比べてみよう！（5歳児）
- ④ お料理作り楽しいね！（2歳児）

<活動中の子供の姿・声・子ども同士や保育者との関わり>

- ① 線路の数が増えたことで、一人ひとりが使える線路の数も増え、取り合いになることが少なくなり、一人ひとりが思いのままにつなげることができるようになった。長くつなげることを純粋に楽しむ子、丸くしたいなどイメージを持ってつなげる子など、それぞれ違う遊び方であっても、同じ場で並行遊びをする姿が見られたり、別の遊びをしていた子が興味を持って見に来る姿も見られたり、友だちのつなげた線路をじっと見て「ながいね。」と言ったりする姿もあった。また、明確に丸くしたいなどのイメージがある子が、「どの線路がいいかなあ？」と保育士が声をかけると、かごの中を見て探し、どのタイプの線路を使えば、その形になるかを考えながら選ぶ姿も見られた。



- ② ままごとをする際に、ローテーブル（長方形）にしたことで、数人の子が同時にままごと遊びをしても、他児と適度な距離を取った中でじっくりと楽しめるようになった。また、広さが確保されたことで、使いたいままごと玩具を広げられるようになった。並行遊びをする中で、時折友だちとの関わりが見られ、「かんぱーい。」とコップを持って合わせたり、「これは〇〇をつくってるの。」という子どもの声に保育士が答えると、周りにいる他の児も、口々に「わたしは〇〇。」と話す。「どうぞ。」「これたべて。」など、簡単なやりとりも楽しんでいた。



③「園庭の木の葉にアゲハチョウの卵を見つけ、「飼ってみたい！」という子どもたちの声から、クラスみんなでアゲハチョウ



の幼虫の飼育、観察をしていた。世話をしながら、「どのアゲハチョウかな。」「ミカンの葉っぱの他には何を食べるんだろう？」と、疑問に思ったことがあると保育士に聞いていたが、「図鑑で調べてみようか？」の保育士の言葉かけで、慌てて室内に行き、図鑑を取ってきて広げていた。これまで離れて置いていた飼育ケースと図鑑を近くに置き、テーブルも近くに設置すると、毎日何度も観察をするようになった。幼虫の小さな変化にも気付けるようになり、友だち同士で教え合ったり、一緒に観察したりする姿も増えた。

ある日、「これ、なんだろう。蛹じゃないよね。」と不思議そうに見ていたので、「もしかしたら、それも図鑑に載ってるかもしれないよ。」と保育士が言うと、図鑑の隅々までよくみて調べ、「蛹化（ようか）」という段階であることに気付き、「おなじだ！」「ほんとだね！」と、驚きと喜びを感じていた。



④ままごとコーナーに冷蔵庫やレンジが増えると、そこで遊ぶ児が増えた。「冷蔵庫で冷やすね」「レンジに入れて…」と子ども同士のやり取りも見られ、ごっこ遊びを楽しんでいる様子が見られた。冷蔵庫・レンジ・ガスコンロ・シンク、家のキッチンのように再現された為、遊びがよりリアルになり、じっくり遊ぶようになった。

5. 振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

- ① ・1歳児の子どもの発達、遊び方にはとても個人差がある。線路をただただ長くつなげたい子もいれば、丸など形にしたい子もいる。玩具の数が増えたことで、それぞれのしたい遊びがじつくりとできるようになった。
・数が増えたことで、どの線路を使おうか、使ったら自分のイメージに合うかなどを考える機会ができた。また、これをつなげたらどんな形になるかということへの気づき、面白さ、やってみる、試してみるという経験につながっている。
・大人がつなげてしまうのではなく、子どものいろいろな遊び方、楽しみ方、それぞれのこどもの興味の持ち方を大切にしたいと改めて思えた。
- ② ・以前はもっと小さなテーブルで、2人くらいが使いたいものを置くとテーブルがいっぱいになってしまい、置く場所の取り合いも起きていたが、スペースが広がったことで、そのようなトラブルも少なくなり、数人で遊んでいても、適度な距離感を保って遊べるようになった。そしてそのことで他児の遊びにも目が向くようになっていたと感じた。
- ③ ・図鑑、飼育ケースを近くに置き、さらにテーブルを設定することで、子どもたちが見たい、調べてみたいと思ったタイミングですぐに調べたり、実物と見比べたりできるようになり、興味関心を深めることができた。
・子どもの疑問に保育士が答えてしまうのではなく、子どもたち自身で調べたり観察したりすることで、自分たちで試したり考えたりする力につながった。
・ゆったりと落ち着いた空間を設定することで、それまで以上に、友だち同士で発見したことや疑問に思ったことを伝えあう姿が増えた。環境設定の大切さを改めて感じた。
捕まえた虫を観察するだけでなく、飼育する経験を通して、命の大切さや虫の成長をより身近に感じる経験ができた。
- ④ ・今までイメージを表現しながら遊んでいたが、冷蔵庫やレンジが増えた事でよりイメージしやすくなり、遊びが広がっていく姿が増えた。また、ままごとであまり遊んだ事がなかった児もままごとコーナーで遊ぶようになる姿も見られた。遊びがリアルになった事で、子ども同士のやり取りも増えたように感じる。